

書評

稲田浩一・大島建彦・川端豊彦
福田 晃・三原幸久 編

『日本昔話事典』

岩 瀬 博

五人の編集者と一七八名の執筆者による、五年間に及ぶ(五人の編集者が構想を練り初めて以降七年になるという。執筆に入った段階で刊行予定の出版社の倒産があり、若干の空白が生ずるといふ苦難の経緯もあった)事業が遂に完成し、A五判、一二〇〇頁、約二〇〇〇項目を収めた歴大な専門事典『日本昔話事典』(弘文堂、八八〇〇円)が五二年一二月に刊行された。

- 総論……………一七一項目
- 伝承・伝播……………一〇三項目
- 話型……………六六〇項目
- 昔話の形式など……………五六六項目
- モチーフ……………四三項目
- 要素(人倫・動物・植物・食物)……………

書評

家屋・道具・その他……………一四七項目

世間話……………六七項目

伝説……………二一〇項目

神話……………五四項目

語り物……………二一項目

民謡……………一八項目

ことわざ……………三九項目

文献記録(古代・中世・近世・近代)

……………一一四項目

地方別研究……………六六項目

外国の昔話(地域別昔話概説・研究者・文献記録・定期刊行物・主要話型)

……………二一七項目

本書は日本で最初の昔話事典であるにもかかわらず質量ともに充実しており、昔話の研究者に寄与するばかりでなく、一般に、広く口承文芸に関する知識を啓き、日本の昔話研究の最先端を紹介する、極めて有意義な書であることは間違いない。本書の優れた特徴を指摘すれば枚挙にいとまがないが、ここでは編集者たちの意図が見事に実現している二、三の基本的性格について紹介してみたい。

一つは、本書が「日本昔話事典」と称しながら、国際的視野のもとに編集されている点である。外国の昔話の項目に全体の一分を越える二一七項目が採用され、世界の四九地域の昔話の概説、

グリム兄弟、アールネなど外国の昔話研究者七〇名の学説を中心とした紹介、六七点の文献記録・定期刊行物の紹介、三一話の国際分布の主要話型の解説などが豊富に記述されている。

外国の研究者七〇名に対して、日本の研究者として項目に採用されているのが、柳田国男、折口信夫など八名で、一見、パラメスを失っている感を与えかねないが、昔話の採集にテープレコーダーの利用が必須となり、ために膨大な昔話資料が蓄積され、それに伴って、昔話研究が一段と進歩した今日にあって、日本の昔話研究も外国の昔話理論を無視してはありえないという編集者たちの姿勢を示しているものと見える。

昔話研究の国際性はその理論導入にとどまらない。同一もしくは類似の話型の国際分布状況は、その話型のルーツと伝播の謎の解明を、古くて永遠に新しいテーマとして我々に与えてくれる。地理的に、世界の極東にあって、文化の吹きだまり的位置にある日本においてはなおさらである。六六〇項目にわたる話型の解説は、筋の紹介、亜型の問題、国内の分布状態、伝播の問題などの精密な記述に重ねて、A・T・K・H・Mと対応させて、読者に国際的視野に立つ話型への理解を与えてくれる。

本書のもう一つの性格は「日本昔話事典」として、昔話を民間伝承の一領域とする日本民俗学の視点を守って、民族学とのドッキングを志向している点である。言うまでもなく、昔話は語り手の個人的資質に依る要素が非常に強い一方で、語り手に働きかけ、同化すら求める地域の、自然と生活も、昔話を内部から支える要

素である。語り手を取り巻く、自然に対する常民の感動、驚異、恐怖などの種々の自然感情、語り手の所属するムラ共同体、イエ共同体の生活に対する常民の思慕、調和、強制などのさまざまな生活感情は、語り手と一体となって、昔話の内的要素を構成している。日本の昔話研究に国際性を求めることは、昔話研究界として、目下の急務ではあるが、ために、昔話の地域性を捨象し、国籍不明の資料として扱うのでは、生きている昔話を殺すことになる。本書の総論の項目に「村」・「家」・「産育」・「婚姻」・「葬送」など、日本民俗学のテクニカルタームを採用している意味は重い。

伝承・伝播の項目に伝承の機会として重要な意味を持つ「大蔵」・「正月」・「七草」などの年中行事が採用されている点や、要素の項目で「猿」・「鶯」・「松」・「稻」などの執筆態度としてそれぞれの動植物に対する日本人の心意が必ず触れられている点からも、本書を日本民俗学の一領域の事典として編集しようとする意図が窺えよう。

本書の基本的特徴をもう一つだけ加えておきたい。それは本書が口承文芸としての昔話事典でありながら、古代から近代に至る一四一点に及ぶ文献資料の項目を採用している点である（加えて、外国の文献資料五九項目がある）。口承文芸研究にとって、文献はあくまでも第二次資料の存在であるが、長い時代にわたって、口承文芸と言えども文献の刺激を受けずにはいかなかった。日本文芸史は口承文芸と記載文芸との交渉史であるという提言が許される程に、両者の関係には密接なるものがある。国際的視野でもイ

ンド、中国、朝鮮などとの関連を考える場合、それらの国の文献を無視することは許されないのであろう。文献の意義が把握されている点は、本書の国文学的視野とも言えよう。

以上のような本書の国際的視野、日本民俗学的視野、更には文献資料の尊重という幅広い性格が、本書を日本で初めての試みであるにもかかわらず、質量ともに充実した、立体感のある事典を誕生させたと言えよう。

こうした豊かな、ユニークな発想は専門を異にする五人の編集者たちの出会いから生じたものと思われる。国文学、民俗学の研究者である福田晃、大島建彦氏、国文学、昔話の研究者である稲田浩二氏、外国文学の研究者である川端豊彦、三原幸久氏の多彩な五氏の出会いは既に三弥井書店刊の「昔話研究資料叢書」、「世界民間文芸叢書」の編集委員として異った立場から、恐らくは議論を十二分に重ねて一つの目的に編集された実績が、本書誕生の以前史として存在する（思えば昔話集に話型対照表を付し、A T を用いる慣習も右資料叢書が先鞭を付けたものであった）。五人の永年にわたる昔話研究に対する信念と情熱が見事に本書に開花したといっても過言ではあるまい。

しかし、日本で初めての試みであるための試行錯誤や、余りにも多数の執筆者を擁したための不統一が、本書に見出されるのも事実である。

日本民俗学のテクニカルチームのいくつかを拾い読みしても、昔話に直接触れることなく、民俗事典的に記述されたものと、昔

話との関連を記述の中心に据えたものがあって、不統一であることは否めない。伝承・伝播の一〇三項目の中には伝播者、伝承の機会などの項目に混じって「水神」・「箒神」・「山姥」・「鬼」・「幽霊」など民間信仰の項目がある。それらが伝承・伝播の分類項目に入れられている点、疑問なしとしない。しかも一つ一つの項目を引いてみても、伝承・伝播に即して執筆されたものよりも、むしろ昔話の要素としての解説に近いものが多い。

モチーフが四三項目しか検索されていない点も不満である。まさか、日本の昔話を構成するモチーフが、これですべてと主張しているのではあるまい。総論の「モチーフ」の項目は国際的モチーフの解説に終始する感がある。せめて「昔話研究史」の項目で配慮されたように、外国、日本の二本立てにして、本書のモチーフ検索の理論を展開してほしかったと思う。総論で昔話を構成する要素として、「モチーフ」、「ツーク」、「要素」を認めながら、「ツーク」の実際を提示して解説していない点については、既に臼田甚五郎氏が『芸能』（五二年三月号）の書評に指摘されている通りである。

以上のような「モチーフ」・「ツーク」・「要素」に対する編集、執筆の姿勢の揺れは、それらの概念規定に研究者間に揺れがあると同時に、昔話の構造への理解と説明が日本では十分に行われていない研究状況の反映で、編集者に要求するのは、ないものねだりに類することは承知の上だが、やはり不満が残る。

以上、あえて瑕瑾を求める言辞を弄したが、私のあげつらいは

本書の存在意義をいささかも損うものではない。付録の、本書の項目に採用した話型を中心に、『名彙』、『集成』、『韓国、中国、A』を対照させた「話型対照表」、明治以降昭和五二年六月までに刊行された資料文献を集めた「日本昔話資料集目録」、外国のタイプ・モチーフ索引、主要昔話集を網羅した「外国昔話資料目録」、

我が国の一三二に及ぶ研究組織をまとめた「昔話研究組織一覧」、四三名の伝承者を紹介した「百話クラスの語り手」はいずれも口承文芸の研究者に有益であり、研究の促進に役立つものである。

(いわせ・ひろし 大谷女子大学助教授)